

野居麈尾卷之四

13
3038
4



特
へ13
3038
4

本定

川本儀

由利雅野居鷹卷之四

万亭 雙馬 戲 編

常陸守

○ 尾總長者逢難風至一嶋

古平相國清盛都々遷一ぬれ松津國福原のほゆるりに。
尾總の長者としく此者あり。陶朱公が風成るる。家千金以
積るれ大賈人なりしが。常小やとれ成以と尊たれ替極積の
道成專らとにけれが。今年ハ西國ハ發船して交易する所の品ハ
ふと取積こ己ハ本國ハ志しけれハ長洲赤間ケ國の沖中ハ飛
風替了鹽向く此船更ハ行中ハ船人帆と引く近た磯ハ去んと

由利雅野卷之四

丁んども風頻の吹て海底に船を沈めんとす。水主揖取周章。遂に管を投入し渦をほくせし。其隙に船を漕戻さんとせし。船曾と動くこと。渦巻ふきつと浪ととも。船の速くこと。人ば白めぐらとよりの。飛速なり。是は何より龍神の賊宝。眼や掛多ひけん。とゆも。多ふなり。みま船底に酔伏て。浪にまひゆる限なり。揖取一人中。み首にわげ丸灘に走る。船不思議。みまの常の形。ひひふも。是は何より。よしの沖中。めて。過一年。平家。数万の軍勢の。ころなり。亡び失れ。と。ん。彼怨業の業。と。と。と。ん。えひ。か。れ。折。め。お。の。く。常。ふ。か。

掛に佛神の御名を唱ふれより。対か別も。な。く。ゆ。と。や。け。ん。の。船中。擧。ア。と。く。同音。み。ま。國。抄。別。住。吉。四。社。の。御。神。と。祈。念。し。風。ふ。は。う。せ。く。漂。ひ。め。れ。と。と。と。ん。も。ら。ん。と。う。り。へ。お。う。り。け。ん。是。の。さ。て。置。先。帝。在。近。の。帝。逆。臣。の。姦。計。お。よ。り。て。沖。の。小。嶋。に。捨。れ。多。ひ。由。利。維。の。の。謀。も。も。八。重。の。攻。略。お。漁。り。せ。れ。海。士。ご。ま。か。よ。つ。ぬ。此。嶋。も。と。て。ら。れ。多。ひ。こと。無。念。骨。體。の。徹。腹。搔。切。く。泉。下。の。鬼。と。なり。怨。心。暗。と。下。と。太。刀。お。ま。を。う。け。お。ひ。こと。度。く。ま。が。ら。む。ひ。と。ら。む。思。ひ。う。え。願。つ。命。の。肉。も。故。郷。お。返。り。此。誓。言。報。り。の。と。大。願。お。起。し。傳。え。と。と。丹。波。

少将成経。平判官康頼。俊寛僧都。ともお。鬼界が嶋。左遷
 小少将と判官とは熊野三社と祈りて。再度帰洛させし
 願のくは氏神正八幡太神應護の睭みせし。一度本國へ
 了。逆臣以誅戮まじしめまへと。渚に寄れ。汝小垢離とり。明
 暮初。了。あひい。人倫施され。嶋なれば。四季の移り。移り
 け。ごう。那。雲井。渡。雁金の。往。春と。秋と
 定め。磯山松の木。が。れ。あ。い。ろ。あ。ふ。人。う。祭。り。置。らん。何。の。の。御
 神。も。あ。れ。ざ。れ。古。に。小。祠。の。わ。り。し。以。伏。所。と。な。り。ま。ひ。一。下。と。せ
 餘り。汝。こ。い。あ。ひ。れ。が。海。松。布。以。拾。み。水。の。淀。小。瘦。ふ。と。終。る

多ひ。あ。れ。面。影。の。移。り。あ。れ。小。こ。こ。が。智。勇。の。由。利。雅。も。悲。歎
 の。ほ。せ。と。の。へ。む。實。や。胡。國。小。橋。し。蕪。武。か。愁。ひ。も。か。や
 ら。ん。と。妻。を。思。ひ。子。以。慕。ひ。その。夜。の。その。所。母。轉。び。産。ま。う。ら
 伏。み。ひ。い。ふ。り。の。間。ふ。く。一。人。の。若。者。由。利。雅。の。御。側。に。兩。手
 以。は。り。上。る。事。の。い。と。高。く。か。よ。り。あ。そ。む。と。由。利。雅。も
 中。う。船。路。と。え。と。れ。此。孤。鳴。よ。そ。も。和。め。し。は。何。國。と。り。て。い。は。れ。し。と
 ぞ。い。と。不。審。ま。り。と。尋。ね。ま。す。年。々。ハ。彼。者。首。以。の。け。君。子。見。し
 も。中。に。あ。れ。入。さ。う。と。あ。う。我。ハ。由。利。雅。別。府。庄。司。の。別。府。司。也
 小。巨。則。の。冠。者。と。す。の。あ。く。い。我。幼。より。父。母。母。捨。り。上。り。し。

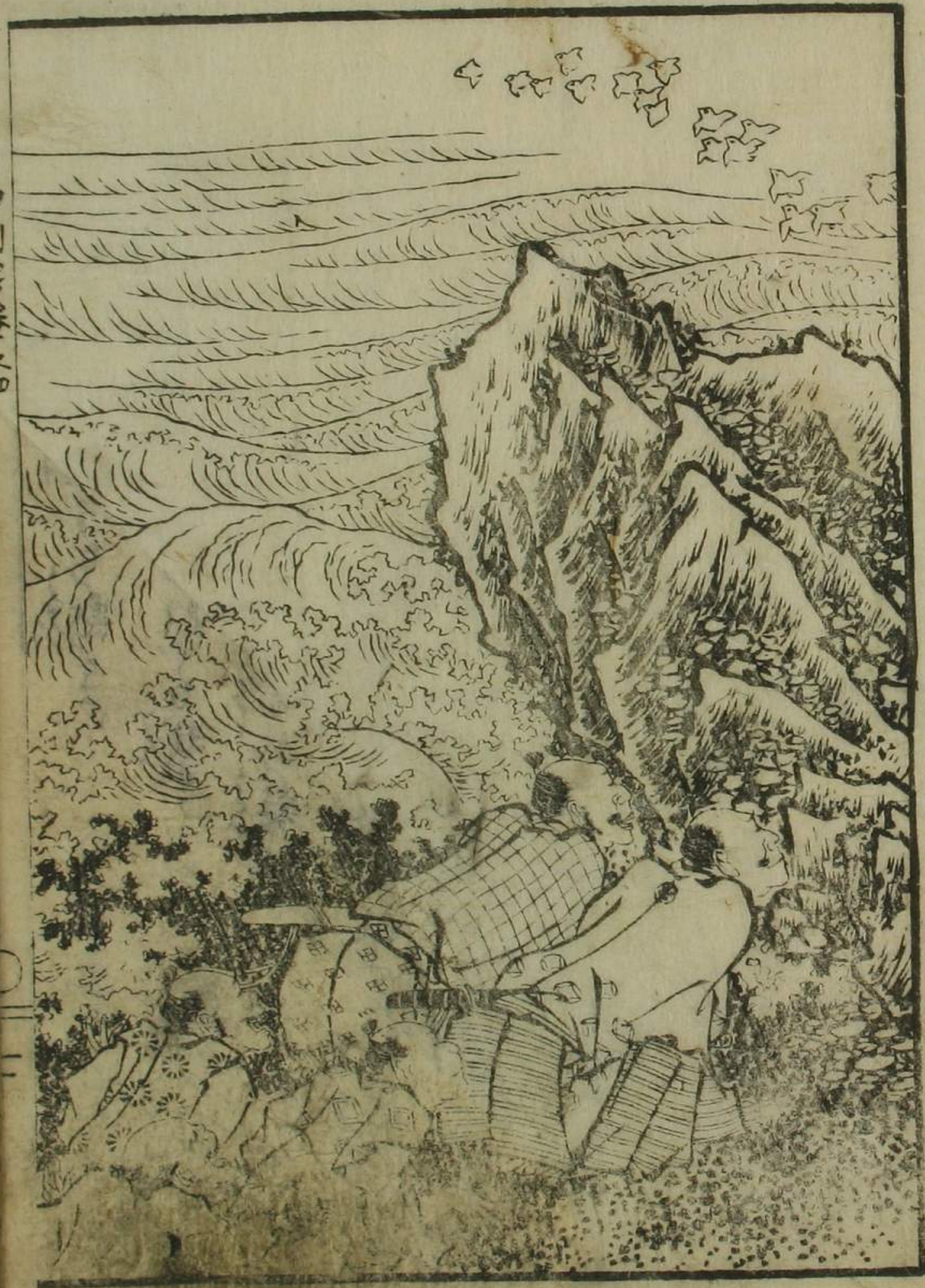
申利言卷之四

國の山中こまらうに長ながひひひふふかかくくははもも御家おんいへの忠臣ちゆうしん差羽さへう六む郎らう只ただ一ひと不謂ふい一ひと凡庄おんしやう司しが惡逆あくぎやく遂ついに一ひとむらむらけけななままりり寔まこと母はは多おほ罪とが身みのかみかかみみぬぬれれどどももののみみららぶぶ我われ遇あはつつくく撫子なごの方かたとと執とらへへししてて天罰てんばつののごごろろ所ところまましし今いまハハ修羅しゆらのの城しろととなりなりゆゆがが幽魂ゆうこんすす志しのの忠ちゆうママ存ぞんじじ海妖かいようとと成なりり御迎おんむかひのの船ふね此こゝ嶋しま母はは着つけけななりり速すみ水みづ際ぎはににあありり其その船ふね不ふ召めいささせせられられ御帰おんかへ國くにににししとと由利ゆり稚殿ちぢゐのの御袖おんそではは史しよよととるる一ひとがが是こゝろ一ひと睡いのの夢ゆめににしてして蕭颯せうさつととれれ松風しょうふう水みづ流ながるるのの響ひびののりりれれとと添そええれれ明方あきかたのの末すえごご香かららととれれ汐しほ曇くもりりのの影かげとと猶なほ眼まなこ母はは渡わたりり幻まぼろしのの如ごとくくおおれればば冥魂めいこんのの詞ことば母ははととくくひひはは

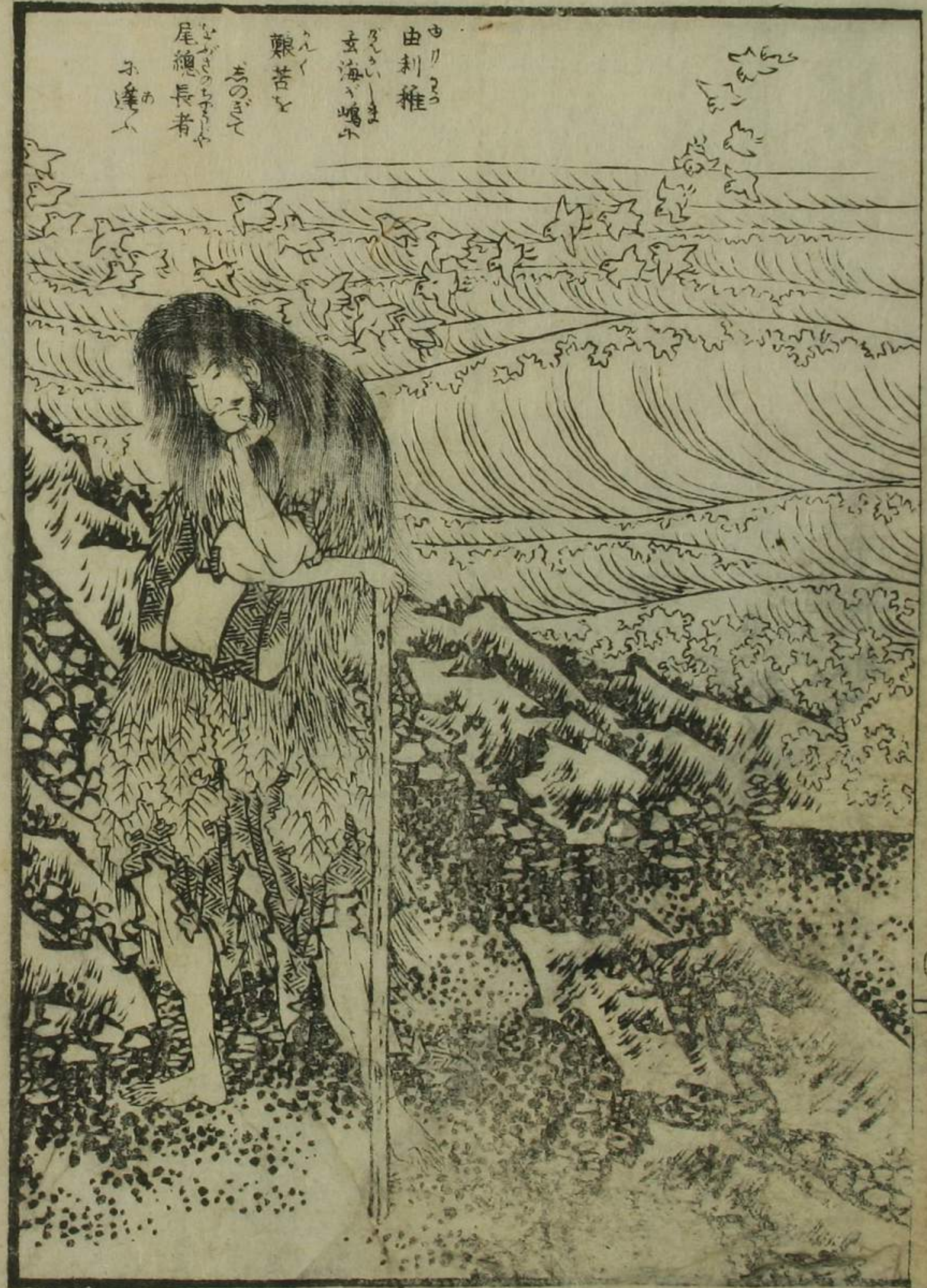
近ちかくくよよ移うつほほひひ出いででいいししおお彼尾おの總そうのの長なが者ものがが船ふねハハ海妖かいようのの鳥とり母はは夜よ益えきとと那なくく惱なごままされられ辛からくくとと寒さむきき折をりりととれれ浮う洲しうにに中ちゆうへへ吹ふ着きられられけけどど先人せんじん心こゝろ地ぢととつつととめめれれどもども此こゝ浦うら河が國くにといいふふををああらら何なにもも遠とほくく唐たうのの地ぢ母ははややままりりけけんんとと心こゝろががああづづめめてて天文てんぶんががここれれ母はは七しち星せい高たかくく光ひかりをを放はなちちいいままとと日本にっぽんのの分ぶん野のとと放はなれれささりりけけどどハハ大おほききとと不ふ喜きひひ扱あひひ益えき夜よ瓜うり分ぶんがが漂たふひひぬぬれれどもども只ただおおははいい海うみ不ふゆゆらられてれてささののここ遠とほくくハハああららぶぶざざりりぞぞ去さままらら夜よ色いろ深ふかいいハハ洲しういいううととれれ沖おほちちううりり形かたちれれやや也や人ひとハハ心こゝろ惑まどひひぬぬれれ折をりり金かね鳥とり注つ洋やう中ちゆう浮うみみ白しろ浪なみ紅べに流ながししけけどどハハ扱あひひとと彼方あつちこそこそ東あづま不ふわわらられれりり

と。瀾不口とて住吉大明神に違拜は。磁石にとりて方角を
弁せぬは頂と。よもほのぐと明とされり。汝の干渉とほ
つ。人うやわるとそとら探し求むる処。由利稚の髪へお
ゆが乱し。ひ。綴成有ふいと。ひ。腰のわたり。みは木のそと。わ
海松和布衣はと。杖ふさかりて立出まふ。以て。船子ども。ま
ふ驚死。こゝろ。まかりけ。仙人さ。ごり。者。まや。の。ん。ほ。じ。く。日。本。の
ち。い。は。え。え。お。が。ら。ん。も。お。ろ。ご。れ。形。う。ね。と。恐。怖。さ。れ。ご。り。な。れ
は。由。利。稚。ま。が。れ。と。れ。声。成。の。げ。い。う。ふ。ん。こ。の。み。怪。し。れ。も。の。ふ
わ。ご。願。く。は。其。船。お。我。お。以。事。あ。せ。何。國。の。浦。な。り。と。も。送。り

呉よか。と。宣。ひ。け。と。も。互。お。眼。と。眼。成。入。合。せ。と。ま。じ。言。さ。か
も。形。由。利。稚。の。姿。成。え。の。げ。見。お。し。は。り。居。き。り。尾。總
の。長。者。の。か。と。ま。より。船。中。成。ら。出。く。由。利。稚。お。ひ。ひ。我。の
持。津。國。難。波。の。浦。お。住。居。ま。れ。買。人。お。て。則。此。船。の。主。ま。ら。不
圖。も。悪。風。の。鳥。お。漂。着。し。て。此。嶋。ま。至。り。ぬ。け。し。ご。ま。れ。お。人
家。の。れ。鳥。も。お。え。え。と。今。と。浪。風。も。ま。が。り。れ。本。國。ま。歸。ら。ん
と。す。お。便。船。成。と。ま。の。り。の。頃。い。う。が。れ。罪。科。の。り。て。配。流
の。人。な。れ。や。猥。了。お。歸。嶋。の。便。船。成。と。ま。の。法。お。そ。し。く。ん。る
を。お。れ。い。ご。り。は。い。ご。も。便。船。の。義。を。叶。お。は。し。く。み。と。言。葉



由利岩卷之四



由利権
 玄海嶺
 艱苦
 尾總長者
 小澤

正しくやけれぬ由利稚ら黙々と足下のいと垂く。の法は
ほりて私の意ぬのど。はれども我す。且て配流の罪人
のど。身の浮沈審ふ語りて人の疑ひとく。よぐと先
帝御衣の始末より其臣の爲に捨られし一徐とく
述ふひられぬ長者にじめ船の者どもこそが木石にわれ
む。或ひは由利稚のいそ。瘻とすれは涙に催し。又へ別府が
邪なれをいり船中に坐す。うけて敬ひなり。長者のよう
情のれぬなり。されば。はぐ。勞てし。已む。故郷抄津國に
く帰帆なり。ぬけり。

○松井田驛由利稚再會只先

益鬼と飯なり。人生の時。陰陽の氣を受て事とく。と
その死とす。ふ及んぐ。二の氣と天地に帰ると以所なり。然れ
ども最期の一念より。志は逐れる。異國本朝そのよめし
とく。おふ。それが巨則の冠者。美魂尾総の長者が船と借
り。由利稚との。再度帰嶋に。しめは誠なる勇士の一言感
れ。不餘りあり。ゆして由利稚の尾總の長者。不便船。と。抄津
國難波の浦の長者。が。り。と。至り。ひ。主船中。あ。て。未
の物語。と。不慮。舟。逆臣の爲。身。危。く。し。あ。と。致。い。と。し



こころめは腰次の一して海月も骨舟のふはしも哉とぞ思ひなれ
此所は長者の家より入寂け近た長源寺とついでにえれ古寺の
宿。仏の教讀經などとはとくしひねど心の直なれどかりと
えみく。長者が方に常行かよひたれが由利稚どの所慰めの
爲とて圓基の心相を折節と系りけりほつりまれ。頃々
師走の末つとぞ形れど。立歸れ春の儲せんとして。誰れと形る
ゆいたじに折られどこの長源坊と世の中ふとむたれ身は寂
寞とて夕部雪いと降るれば山陰の昔よなふ由利
稚の訪ひふせんとはあへども。蓑笠の用意とふまければ。



米の俵は売まかりたれを引かがり。由利稚の許坊ひまの
けり。儲又うの姫と今宵の雪も降るぬ恋人のいにて淋
在をなめりと。酒肴用意は浴の衣打うらだ已がおりぬ救
かさ口説りか度たどりく行みは在はしと家の柴垣近
みく小坊主の明俵あかりかづりたれみ端となく行合たり。
あひはげへく大入道よと驚けは此方へはほはれ老女の化
雪女とて公戦くに折伏と竹の雪散と二人が襟へこんと
互ひあつくと倒さ中其は正氣を失ひり。探障とされ
踏かす。夜廻りされ奴隷の是とすつひ。稍は喚活とす。

めとえ柴どりくべてめとめけれバ頓息ハ生みり。中道
なれ人の口百とせむ一とせ足るぬ老の身ハ尤のり
同公戀と思案の外さう。わまり似げうた道行り
語り傳てく笑ひり。心なれ賤とて斯暮ひちたりの
長者が家擧アてそかなく仕え奉りせられバ由利稚厚
再生の恩感謝。急た本國下たれ由利告多人ハ長者
中の僕とめども天下の英雄と救ひたりし事何某冠
亡霊の致と所とはやま。且又天我ハ命じまのなり
今年ハ既み家も暮のハ願くは春春たりて燭夜

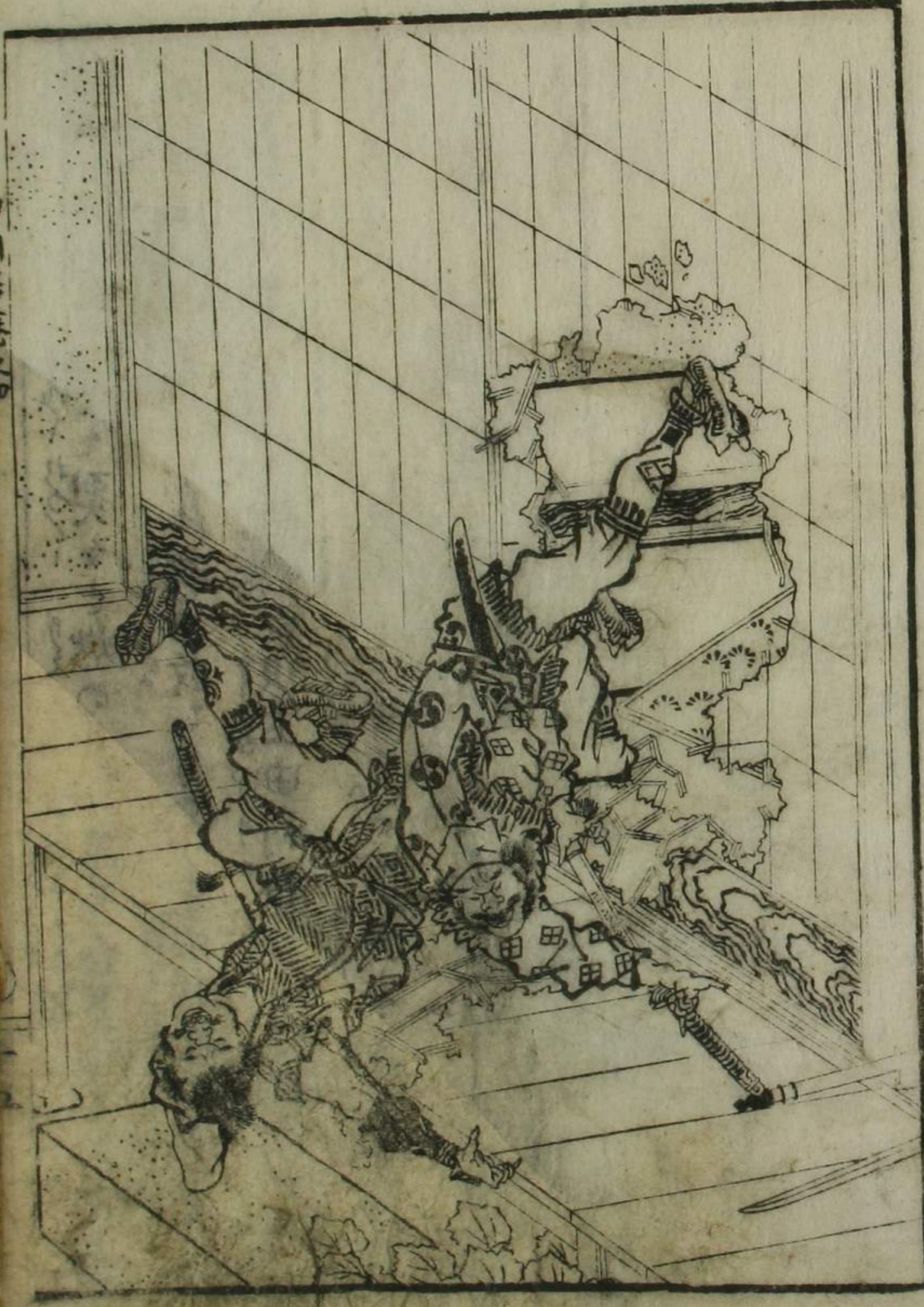
ゆえり僕も稼穡の爲ハ東國へ下ての間供りか上げ見
送てりたくんと餘義もるげみりけむ由利稚もその言葉ハ
あごがハ此家以主としてわと玉の春次行りひけア實や先陰
あぐくもとほむ。垣根の梅もほひを飛。名みハ柳難
の浦れ春の景色汐焼けり立ちひてい。臙が
詠めむハ故郷のこととひつげま折か。代ハ雁金の
わのうかりハ。故郷ハ帰れハ金小夜うけて雲踏お迷ハ
とわら舟打誦し多ひめれハ長者賢くも心ら後のうら

頼りくまづぐの巻物よりいじし袍袴のたふしと言ふさふなり。
 の調度うんとこと用意しなり。巳とも從者十人むり召具し
 二月半吉日辰えらみいご去年の冬やせとて東國へ借す
 君の本國へ下りてあり。御家の忠臣迎へたり。逆長坂討んとて
 うらみめり。ざしと法門出の御土釜取すいせ。驛路の鈴の音き
 く。そのおと由利稚の御馬に附そひたり。上野の國みへ兼
 此君の恩顧の者多くいふされば。かとうみさるゑ馬とごとく東仙
 ふかき下りるひけが不日し。上野の國松井田とつれ
 み着るふ。その頃と此所家の中やく一二軒もわけて夫々人墓地

透垣の中のものもみ。最浅猿なれ舎りなり。長者へ由利稚の
 旅の憂さ慰めし。せんとのれ陽りの傀儡めし。出て酌
 取らせ。村酒野肴のあけうなれも。亦時の真なふめと。臭き
 かきりなれ味噌を。和る牛旁のれい小中なれ麩を串おつ
 移して武藏坊が名みよせ。これを二荒山の山折舗小盛ると
 上下隔るくらち交りて酌かきせ。さとうに益の疲とを忘れ
 は酒酔うに浪速江の今換らねも。提の底敲となし
 て猿樂のはるひも。れもあり。由利稚のめ。殆自み入るひ
 己不夜も更行やどに夜の衾も。そとく。小各その俣酔め

春の夜け一刻花の清香月影ののりけなれ風情を疾くおとも
りて千金の貪らん人をも人を殺し火火放つ山賊ともさすも
長者が旅装束の美しけおとろとめ此二三日附初は
今宵こそ究竟の首尾なれ同志の溢りの火集め討つは
と悲び入れこころハ斯ともあふと前後は忘と伏せれと
妻戸障子蹴放し我先母と乱し入る尾總の長者と物
ゆふひも寄ぬ事なれをたれお途火失ひ案内さぬ旅のやど
狼狽さるばるなり由利維と一間のうらみいさど寝も中
と何とも故郷のやうともうかひく別府火討の謀計火案に

鬱くとし居みひが此物音火さくよりも常も動トふりぬ
大将なればあぐら袴の細締車側高くとりて枕おさる太刀
引そのめ踊いで込入れ大勢火ことどもしむつと矢庭に五六人礮ふ
打て此方の柴垣火小猶ふとり眼火くらりて立ちた勢ひ小流
石の賊も僻易して少くあけてええと所不強盗れ張本
とどした男いつの間あは初ひより透火見合せ後より
と組むかほりりと振る形せかい沈んぞ下子お組む大か
由利維なれも賊もまご鳴呼の者なれおいやくとおい合
勝負の牛角の取相なりし小家前賊もが投捨く松明の火



左羽六郎
 夜計七
 主君
 見ゆ

妻戸ふらつて炎々烈々と燃のづれが忽ち白昼のぶとくなく
此ひうりふ彼曲者組と腕が放ちもやど由利稚の顔とさうつ
と見えくいうもや君へ出羽國の領主由利稚君あて在さざやと
呼りよば由利稚も賊の負瓜うら守り。さしよはと差羽大郎お
てのなれやと宣ふも。六郎いそげ大地おひき伏しよのそも如
何なれ事なれや正しく君と先年兼久の戦の時乱軍の中お
討とあつとらけなまつれお主従の縁のしよと盡と再度見へ奉
れと不思議といふも餘りありと猶うとがけの風情なれど
由利稚完爾と打笑ひ喜びの心眼み涙と浮へ寔お汝が不審

りつともろの先く近ふまりのゆくと塵うら拂ひ坐正しよへ
六郎も餘りの嬉しきお暫し一言葉もななく落涙おそおよび
つ了。由利稚と六郎お向ひ別府兄弟が悪逆ふらりて孤嶋の中
ふ年が越え一艱難巨則が亡霊忠誠盡し。尾總の長者が情
すて残れ所なく語りよくと。六郎もお家の騒動北の方れ伊
期。緑丸との瓜守護するも。此驛路近に山中お潜み居れこと
逐一お述べられも。尾總の長者のいふ及つと並居れ面々一同お
袖をちぢぬへなうりけり。六郎おけれは是より遙う南小當
山の谷陰こそ我隠家おけりて一まがごとく入りて君を

ふも^ごの^ご對^ご面^めありて後^{のち}別^{べつ}府^ふ見^み弟^{てい}弟^{てい}城^{じやう}亡^なすと^と討^うを^を評^{ひやう}議^ぎと^とす。
 いご^ごせ^せと^と由^ゆ利^り稚^ちの^の御^ご馬^ばの^の口^{くち}城^{じやう}と^とり。尾^お総^{さう}も^も厚^あく^く深^{ふか}美^み
 の^の恩^{おん}城^{じやう}謝^{しゃ}。おの^の引^ひ連^{れん}陰^{いん}家^か（案^{あん}内^{ない}）^しけ^けと。

由利稚野居鷹巻之四巻



色^{いろ}と^と枝^えを^をさ^さら^らせ^せと^とお^おも^もい^いな^なす^す
 枝^えを^をさ^さら^らせ^せと^とお^おも^もい^いな^なす^す

御^ご馬^ばの^の口^{くち}城^{じやう}と^とり

四^し

